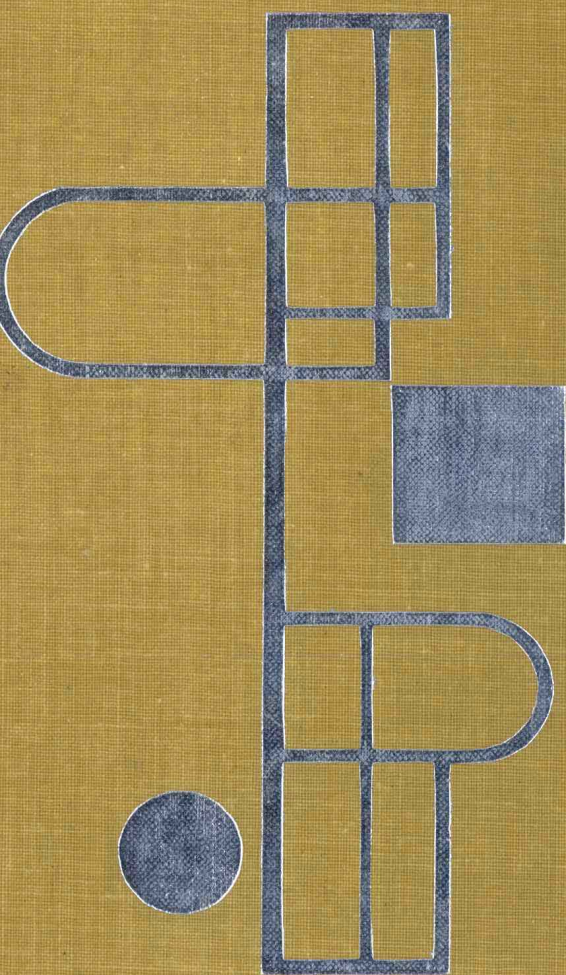


現代戲曲集

12



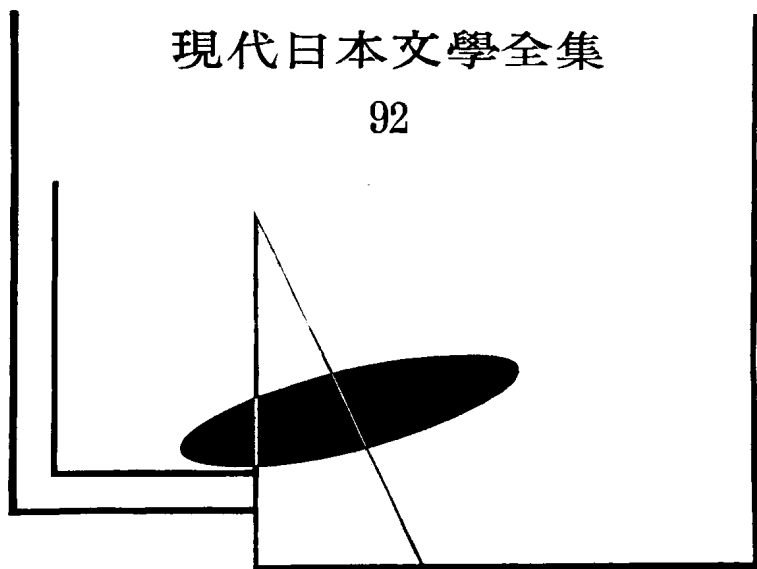
現代日本文學全集



現代戲曲集

現代日本文學全集

92



筑 摩 書 房 版

現代戲曲集

昭和三十三年一月二十日 印刷
昭和三十三年一月二十五日 發行

代著者 秋田雨雀
あき た り じゃく

發行者 古田晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

印刷者 山田一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

發行者 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八
整版 株式會社精興社
印刷 株式會社精興社
製本 株式會社矢島製本所

現代戯曲集 目次

長田秀雄

池田大伍

歡樂の鬼

根岸の一夜

松居松翁

鈴木泉三郎

秀吉と淀君

生きてゐる小平次

秋田雨雀

金子洋文

埋れた春

牝鶏

中村吉藏

川口一郎

剃刀

二十六番館

岡 鬼太郎

阪中正夫

今様薩摩歌

馬

關口次郎

内村直也

母親

秋水嶺

空

一五

哭

一六

三

一六

四

一〇

二〇

八

五

七

久板榮二郎

斷層……………一六〇

森本薰

女の一生……………二二三

加藤道夫

なよたけ……………二四四

飯澤匡

崑崙山の人々……………二五〇

田中千禾夫

教育……………二五〇

小山祐士

二人だけの舞踏會……………二五四

解説……………二五九

年譜……………二六六

装幀 恩地孝四郎

現代戲曲集



歡樂の鬼

登場人物

法學博士 遠藤 亨
夫人 敏子
檢事 津田 三吉
醫師 互理慎太郎
下婢 みよ

現代

所

東京山の手の屋敷町

法學博士遠藤亨の書齋。既に古びて華文の

長田秀雄

擦り切れたる海老茶色の絨氈を敷きたり。室内は極めて質素に裝飾せらる。

正面、中央に兩開きの玻璃扉あり。庭園に通ず。

その左右に大なる窓、各一個宛あり。帷幕は開かれたり。

左手、奥に入口。其れに續きて壁一面の大書架あり。洋書充滿す。

正面、右側の窓の下に、大なる讀書卓一個を据う。右手中央に古風なるカミン爐あり。上に置時計鏡などを載す。卓の右方、壁間に泰西法律學者の大なる寫眞像をかかぐ。

カミン爐に續きて玄關に通ずる兩開きの扉あり。室内の中央よりやや右の奥に、小なる圓卓一個を据う。その周圍に椅子數脚。書架の前に、ソファ一脚よこたはる。室内の情調は、陰鬱にして悽愴なる事、都會の曉に似たり。愉快に疊りたる初夏の夜は、その暗き眼を以て、玻璃の窓より覗へり。夫人、敏子、年わかき地方裁判所檢事、津田三吉と、小卓に相向ひて談笑す。三吉は

洒落たる背廣にて、金縁の近眼鏡をかけた。三吉の語調、舉止、すべて極めて都會的なり。

夫人の眼、折々に何物かを凝視する時、その主我的なる容貌に、犯しがたき女性の權威を現はす。折々遠方の電光、瞬くごとく窓に映射す。

敏子（心安げに卓上に手を載せて）貴方も御存知でせう。松岡博士の長男の方、——ほら、あの工學士に御成りなすつた？

三吉 えい。よく知つて居ますよ。熊本の高等學校に、一緒に居ましたから。

敏子 昨夜あの方の御結婚の御披露が、紅葉館であつたものですから、私も參りましたが、一寸綺麗な夫人ですよ。

三吉 さうでせう。何でも華族女學校で、有名な美人だつたさうですからなあ。それに松岡君もあの通り綺麗な男ですから、全く理想的な夫婦でせう。

敏子 さうね。ですが、私は松岡さんのやうな顔立は厭ですよ。

三吉 何故です。色が白くつて、凛々しくて、所謂白智の美丈夫ぢやありませんか。

敏子（三吉を凝視して）私はもう少し弱々しい男の方が好きですよ。あんな強い顔付を見ると、何だか此方が威壓されるやうで、不愉快で耐りませんの。

三吉 つまり貴女は男の内から女性的の美を攫

み取らうと云ふのでせう。貴女みたやうに感情の荒んだ夫人は、多くさう云ふ風になつてしまひますね。

敏子 まあ非道い。ぢや私は年増藝者が俳優を買ふのと同じ心持で、弱々しい方を好むのでせうか？

三吉 まあさうです。藝者は醜惡な現實にふれて教育されますが、貴女は讀書によつて、其處まで到達したのです。

敏子 (故意に微笑す) 貴方は私がさうなつたのを、輕蔑なさるのですか？

三吉 (微笑して) 飛んでもない事を。僕は決して貴女を輕蔑しやしませんよ。唯、貴女は餘り文學書類を讀み過ぎました。(時計をみる) それはさうと、先生は、大變遅いぢやありませんか？

敏子 何でも學校から歸つて、又出たのださうです。私も今日は晝から、一寸他處へ行きましてから——併し、もう歸つて參るでせう。

三吉 何か御忙がしい仕事でも御ありなさるのですか？

敏子 いゝえ、學校から歸つて、外出する事は減多にないのですが、今日は生憎——

三吉 相かはらず御勉強でせうね？

敏子 えい。何うして家はあんなに出不精なのでせう。毎日毎日、書籍ばかりいちぢくりまはしてゐて、能く倦きませんねえ。(室内を見廻す) それにこの書齋の陰氣な事といつたら——私は一人では、一時間も辛抱できませ

んよ。

三吉 さう、さう。僕がまだ御厄介になつてゐた時分から、貴女はこの室が厭でしたね。

敏子 (他事を考へ居たるが、俄に氣付きて) えい。さうですよ。(三吉をみて微笑す。) ねえ。津田さん。貴方ももう夫人を、御貰ひなさなくちやなりませんねえ。家から大學へ通つていらしたのは、本統に此間のやうですが、もう(指折りかぞへて)さうさう、精一が生れてから、間もなく御卒業なすつたのですから、五年近くになりますのねえ。

三吉 (微笑す。) 結婚ですつて。戯談云つちやいけません。それとも持參金でも澤山持つて來てくれる人があれば、貰つてもさしつかへはありませんが、現今結婚して、夫婦で乾干になるなんざあ、あまり感心しませんからね。

敏子 だつて貴方くらゐ取れば、生活には充分ぢやありませんか。まあ自分で家庭を持つて御覽なさい。下宿なんかしてゐるより、何の位心持がいいか知れませんか。御幾歲でしたつけねえ、今年？

三吉 僕ですか？

敏子 えい。

三吉 卅二になりますよ。たしか貴女より三つ上だつた、と思ひますが——

敏子 さうでしたつけねえ。ぢやもう急いで御持ちにならなけりや、どんな女だつて、頭の禿げた御婿さんよりは、禿げてゐない方を好みますからね。(微笑す。) 此れから私がせい

ぜい心がけて置きますせう。

三吉 (戯談らしく) 何うか願ひます。なるべく美人で、若い處を——

敏子 ほう……(間をおきて) だけれど貴方は否氣だから却つて私達より若くみえますよ。

三吉 (夫人を熱視めて) さう云へば、貴女は近頃恐ろしく更けてきましたねえ。さうして、敏子 (強ひて微笑す。三吉の談をさへぎりて、早口に) もう御婆さんですもの——

三吉 顔色もよくないやうです。何處か悪いのぢやありませんか——醫者に診せて御覽なさい。

敏子 宅でも始終、「汝は此頃色が悪い。」つて云ひますから、此間御醫者さんに診て頂いたのですが、別に何ともないさうです。

三吉 (猶夫人より眼を放さずに) それならやう御座んすが。(間) 精一さんが死んでから、貴女はすつかり前と變つてしまつたやうです。何時まで思つても、同じ事ぢやありませんか。それより心を快活にして、せいぜい美味い物でも、食べて御覽なさい。またすぐ後が出來ますよ。

敏子 (憂鬱なる凝視) 精一。(間を置く。神經的に) あんな恐ろしい顔付の子供が、何うして私の腹から生れたのでせう。あの時分の事は、考へてもぞつとします。(半ば獨語のやうに) 宅にも私にも少しも似てゐない獸のやうに醜い兒でしたね。(間) 私はあの兒を始めて見たとき、恥かしいやら情ないやらで、

氣が狂ふやうでした。(聲をひそめて)津田さん。恐ろしい事です、私は一遍あの兒を殺さうとした事がありますよ。

三吉 (沈痛に) さう。僕もあの頃は丁度御家に居ましたから、よく知つて居ます。貴女の産後の肥立が思はしくない上に、あの劇烈なヒステリーでせう。あれでは先生も餘程心配して居られたやうでした。

敏子 (迫るが如く) ねえ津田さん。何うしてあんな兒が生れたのでせう。(意味ありげに三吉を凝視す。間。) 両親とも健康で、血統も極く正しい家庭にも、あんな子供が生れるものでせうか？

三吉 さあ。さう云ふ醫學上の問題は、僕にはよく分りませんが、顔や姿の醜いのは必ずしも。

敏子 (談をさへぎる。熱心に) いゝえ。精一の顔の醜くかつた事ばかりを云ふのではありません。(聲をひそめて) あれは低能兒でしよ。

三吉 (夫人を熟視して) 低能兒。(間) そんな事はありません。

敏子 いゝえ。確にさうです。やつと五つになつたばかりで死んだものですから、他處の御方には分からなかつたやうですが、宅と私には、あれの腦の發育が、餘程鈍いのがよく見えて居たのです。

三吉 併し男の兒は、一體に發育が遅いものです。僕は精一さんが、やうやく二つになら

れた時、岡山の裁判所へやられたので、それから何う云ふ風に成長されたか、少しも知りませんが、僕の兄の長男などは、今年四つになります、まだ能く言葉が出来ないやうです。

敏子 えい。精一も死ぬまで、満足に言葉がでませんでした。併し、それはかりぢやありません。あの兒には、物を記憶える事が、何うしても出来なかつたのです。五つになつて、父母の顔さへ能く見分けが付かなかつた位ですもの。

三吉 (少時沈黙) 御病氣はたしか腦膜炎でした。亡くなられた時の？

敏子 えい。急性腦膜炎でした。(間) その苦しみやうと云つたら——まるで大人が死ぬやうでした。私は見てゐられないで病室から逃げ出した位です。今でも時々思ひ出しては身顫しますよ。厭な聲で呻吟るのが、何とも云へませんでした。

三吉 なる程。餘程ながく罹らつて居らつたのですか？

敏子 いゝえ。ほんの一週間ばかりで亡くなりました。丁度宅が京都の方へ講演に行つて、今日東京へ來ると云ふ日でした。罹らひでしたのは。

三吉 ぢや先生の御留守だつたのですか？

敏子 えい。七時の汽車で歸ると云ふ電報が來たものですから、私は夕飯をかつこんで、急いで新橋へ迎ひに參りました。丁度、其日

は、夜半に雪でも降りはいまいかと思はれる黄色く曇つた寒い日でしたから、私は一枚餘計に衣服を着て、玄關に出ますと、精一が疲れたやうな悲しいやうな妙な顔付で、後からついて來ます。私は車の上から「この寒いのに、こんな所へ出て來てはいけません。早く内へ御入りなさい。」つて、叱りながら門を出ました。今思ふと、その時ももう罹らつて居たのです。

三吉 なる程。ぢやそれ迄は、別に變つた事はなかつたのですか？

敏子 (首を振る。) えい。別に何にも。(間)

いつもの通り御飯も食べましたし、何處が痛い云ふ事もなかつたやうです。さうしますと、生憎宅の汽車が脱線したとかで、新橋へ着くのが大層遅れて、二人が家へ歸りましたのは、もうかれこれ九時でした。宅はあれでなかなか子煩悩ですから、此處で、紅茶を飲みながら「精一は何うした。もう寝たか。」つて訊きます。私は家を出る時、女中に「八時になつたら子供を御寢せ。」つて云ひつけて、置きましたから「はいもう寝んだでせう。」と云ひながら、後を見ますと、(左側の入口を指さす。) あそこから、黙つてあの兒が出て來ました。その顔色と云つたら——すつかり蒼ざめてしまつて——何だか苦しさうに、がたがた顫へてゐるぢやありませんか。宅がびつくりして、額に手をあててみますと、全で焼けるやうなのです、これは大變だ、と

云ふので、互理さん、貴方も知つて居らつしやるでせう？

三吉 えい。東京病院の院長でせう？

敏子 えい。あの方に診て頂いたのです。その晩すぐ。(間)するとあの方がむづかしい顔をなすつて、「夫人。御氣の毒ですが、坊ちゃんはまだもう醫師の手では癒りません。餘程性の悪い急性腦膜炎です。」と仰しやいました。ですから、私はもう始から助からないものだ、と諦めて居りました。

(少時沈黙。)

三吉 全くあの病氣ぐるる子供に取つて、恐ろしいものはありません。大抵死んでしまひますが、もし癒つても、多くは白痴になつて、一生、親兄弟に歎をかけるのですから――

敏子 えい。さうですとも。薄情なやうですけれど、あの兄は死んだ方が、自分にも幸福だつたと思ひますよ。たとへ、貴方、生きて居た所が、何も仕事が出来るぢやなし、一生涯父の厄介になつてゐて、人様の笑ひ物です。その内に私共が死んで御覽なさい。それこそ誰もかまひ手はありませんから、乞食になるか、養育院にでも入るより、外に仕方がありません。

三吉 まさかさうでもありますが、併しさう云ふ不幸な身體を持つて生れた人は、却つて早く死んだ方が、苦痛が少ないかも知れませんね。

敏子 (突然神經的に) ですが津田さん。何う

してあんな兄が、私の腹から生れたのでせう。(間) あれは全く淺ましい兄でしたよ。貴方はあれが大きくなつてからの事は、御存知ないのですが、もう三つ位の時から、あの厭らしい醜いのが、すつかり大人になり切つて居ましたよ。身體はまだ子供でゐながら、顔付ばかりが大人に――さうして髪の毛が厭に薄くつて(肩をひそむ)顔を見て居ると、全で老人のやうでしたよ。あんな氣味の悪い兄はありませんね。

三吉 さあ。先生も貴女も血統は正しいし、悪い病氣はないし――ただ單に偶然と云ふより外に、説明の仕様はありませんなあ。

敏子 (疑ふやうに三吉を凝視す) 偶然でせうか。(間) 宅はよくあの兄の顔を見つめて、「これは淺ましい造化の謎だ。」と云ひましたが、私には何うしても、偶然の出来事とは思へません。宅か私か何方かに深い罪があつて、その報があの兄に現はれたのではないかと、思ひます。つまり云ひかへれば、精一は恐ろしい血族の罪の記念なのでありますまいか。

三吉 そんな馬鹿氣た事があるもんですか。貴女は相かはらず浪漫的な思想で、現實を判斷してゐますね。

敏子 いゝえ。さう云ふ意味で云つたのではありません。私の云つた恐ろしい血族の罪の記念と云ふのは、もつと實際的な言葉なのです。(聲をひそめて) ねえ、津田さん。私は時々さう思ひますよ。宅が若い時分に非常に放蕩

か何かして、その結果が精一になつたのではないでせうか。

三吉 では貴女は何かそんな證據でも御覽なすつたのですか。

敏子 いゝえ。別に證據を見た譯ではないのですが、何うしたのか、私にはさう見えて仕方がないのです。

三吉 それは貴女の邪推ですよ。もし先生にさう云ふ罪があつたとしたら、貴女と結婚されてからの、あの謹嚴な態度は、證明することが出来ないぢやないですか。

敏子 それはさうですが、私はね、そんな小説を讀んだ事があります。ある非常に眞面目な紳士が家庭を造つて、幸福に日を送つてゐると、その夫人が娘の時分、戀人があつてその人から、ある病氣を受けて居たのです。處が、當人もそれを知らずに、結婚してしまつて、もう前の戀人の事は、すつかり忘れてゐると、四五年経つてから、懐胎したので、生れて見るとその子供は母の遺傳によつて、何時までも言葉を記憶えないのです。そこで紳士は啞の兄を抱いて、陰鬱な書齋に、夫人に對する殘忍な復讐をもくろみながら、一人寂しく日を送る、と云ふ筋なのです。これは小説ですけれども、さう云ふ事實は、世界には有り勝ちなのですからねえ――

三吉 それ御覽なさい。矢張貴女が小説を讀みすぎたから、さう云ふ事を考へるのです。全く詩的空想といふ奴は、家庭に取つて、何よ

り禁物です。それよりか御料理でも、習つて御覽なさい。先生は喜ばれるし我々も時々御馳走に有つける譯ですから。はゝゝ……

敏子 (輕き不快の表情) 貴方は御自分以外の者は、實に殘酷に批判なさるのね。だけれど御茶屋へ行つて藝者を買ふのと、比べたら、何うでせう？

三吉 いや。それは異ひます。貴女は男と女と云ふ二種類の間を、一緒にして考へてゐるからいけないのです。

敏子 いゝえ、決して男と女とを、一緒にして考へて居るのではありません。私は私の考へた婦人の立場を、始終守つて居るのです。

三吉 それは何う云ふ事なのです？

敏子 つまり婦人といふ字から、此れ迄の弱い恥かしい奴隷的な意味を取つてしまふのです。私は向日葵のやうに、太陽の光りをうけて、思ふさま輝いてみたいと思ひます。

(右側の兩開きの扉あきて、下婢みよ入り来る。)

みよ 夫人。旦那様がお歸り遊ばしました。

敏子 さう、御歸りになつたの？

(博士遠藤亭、地味なる洋装にて、葉巻を口にくはへたるまま入り来る。)

敏子 (立上りて) 御歸りなさいまし。(頭を下ぐ)

亭 やあ。津田君か。久し振だつたなあ。

三吉 (立上りて) 餘り御無沙汰をしましたから――

亭 御無沙汰は御互だ。はゝゝ……

敏子 津田さんは貴方を、二時間ばかり待つていらつしやいましたよ。

亭 さうか。それは御氣の毒だつた。まあ掛け玉へ。

(博士はその讀書卓の前なる凭り掛りの椅子に腰かけ、卓上に置かれたる二三通の手紙を読む。)

(三吉も夫人も無言にて、椅子に腰かける。)

敏子 貴方。それから今日の晝過ぎに、東洋堂とか申す書店の番頭が參つたさうで御座います。私は丁度留守で御座いましたが――

亭 (手紙を読みつつ) うん訊いた。

(少時沈黙。)

(やがて手紙を卷き收めて。)

亭 俺の留守に、互理は來なかつたか？

敏子 いゝえ。御出でになりませんよ。

亭 さうか。今日は一寸用事があつたので、學校から電話をかけたら、七時頃御宅へ伺ふから、と云ふ事だつたから――それではもう来るだらう。(椅子を三吉の方へ向け直す。)

敏子 紅茶でも入れて來ないか。

敏子 はい。(左側の入口より去らんとして)

貴方。御飯は？

亭 飯か？ 飯はもう濟んだ。

(敏子去る。)

亭 津田君。近頃は何うだ。役所の方は面白い

か。

三吉 いや一向面白い事ありません。それでも岡山よりはいいやうです。

亭 併し田舎の方が静かで、勉強ができさうだ

が――

三吉 無効です。何しろ周囲の人が皆呑氣な樂天家ばかりですから、若い人間がゆくと、刺戟がないので、不知不識自分も馬鹿になつてしまひます。もう田舎廻りは眞平です。

亭 はゝゝ……それはさうかも知れん。(卓上の煙草箱を出し) 何うだ。一本やり玉へ。

三吉 は。ぢや一本頂きます。(葉巻に火を點ず。)

亭 時に君は相かはらず下宿住ひだらう？

三吉 えゝ。さうです。

亭 不便だらう。何うだ、家を持つてみては？

三吉 何。もう五六年馴れた生活ですから、別に不便とも思ひません。それにもう少し獨身で、勉強して見たいと思ひますから――

亭 それもさうだな。(間) 實は先日君の兄さんから、手紙が來たが、「君に結婚を勧めても、何うしても聽き入れないので、両親が非常に心配して居る。ついては貴方から、何とか是非結婚するやうに、云ひきかせてくれ。」と書いてあつたが――併し君がさう云ふ考であるなら、その通りに俺の方から返事を出しておかう。

三吉 (輕く頭を低げて) 何うかさう願ひます。

田舎の老人などと云ふものは、全く頑固でこまります。それは自分の生きて居る内に孫の

さう、兎に角君の御父さんは、頑固な點では、我々の親類中で、有名な方なのだから、君も随分困る事があるだらう。併し親なんと云ふ者は、あとさう長く生きてゐるものでもなし、安心させて置くと、また一方では、君の生活に便利な事もあるから、なるべく反抗しない方がいいと俺は思ふ。

三吉 それはさうです。何しろ僕の親父は、非常に先生を信仰して居ますから、今度の事なにと、先生から上手に云つてやつて下されば、きつと安心するだらう、と思ひます。御迷惑ですが、どうぞ——（軽く頭を低く）
亨 外に丁度少し用事もあるから、では其序に書いておかう。

（敏子、洋銀の盆に、紅茶を載せて入り來る。）

敏子 味が何うですか。よく出ましたかしら――

三吉（紅茶を飲みながら）いや。結構です。
昔から夫人は紅茶を入れることは、名人でし

(紅茶を喫す。)

息子（微笑す。）それは貴方、十年以上、毎日
毎日入れさせられて居ますもの、上手になる
筈ですわ。全く宅みたやうに、紅茶の好きな
人はありませんねえ。

(博士小卓に片脰を突き、惱ましげに指を以て、雙方の顚顚部を押さへゐる。)

三吉（之をみて）先生。何うかなさいましたか？

亨
(獨語のやうに) 何うもいかん。

敏子（顔を博士の方によせて）貴方。また痛み出しましたか？（三吉に向ひて）此頃は夜になると、きまつて頭がいたいと申しますの。

亨（顔を上ぐ。）津田君。實に妙だよ。晝間は
何ともなくて、夜になると腦の奥が糸を曳く
やうに痛んで来る。

三吉 脳が悪いのぢやありませんか？

亨 さあ。(間) さうかも知れない。

三吉　もう醫者に御診せなさいましたか？

亭 いや、まだ診せない。つい暇がないものだから。

三吉（間を置きて）早く御診せなすつたらい
いぢやありませんか。（間）脳でも悪いと太
變ですから――

亭（俺み疲れたやうに微笑す。）いま脳が悪く
なると、俺は物質上にも破産しなければなら
ん。

敏子 貴方。今日互理さんは、御診察にいらつ

しやるのですか？

亭 うん。外にも一寸用事があるので、序ついでに診察もして貰ひたかつたから、電話をかけたのだ。

(少時沈默。)

敏子　もういらつしやりさうなものですね。

三吉（問を置きて）先生、今度御書きになる
法理學新論と云ふ書籍は、いつ頃出來るので
すか？

亨 さあ。まだ漸く思想がまとまつただけで、

少しも書いてないから、能くは分らんが、何うしても後三四年はかかるだらうと思ふな。

三吉　ぢや大分大部なものですな？
 亨　いや。それ程でもない。三千頁内外のもの

だらう。

三吉 西洋人の考へ出した法理學とは、餘程異ちがふのでせうな。

亭無論異ふ。

亭 無論異ふ。俺の新らしい思想を説明する爲めには、これ迄の法理學とは、立論の基礎までも變つて來なければならぬのだ。(次第に熱心になる)俺はあの書籍を、俺の生存の記念として、總ての人類に進呈したいと思ふ。少くとも俺のこれ迄の讀書と思索とは、あの書籍によつて始めて一個の果實となるのだから――

三吉 實は、この間偶然電車で、内田博士に御

眼にかかりましてね。

亨 内田には久しく會はんが、病氣は少し快よい

と見えるな？

三吉 えゝ。血色もよし、餘程以前より肥つて

來られたやうです。併し何と云つても、もう長い事はありますまい。右の肺はすっかり腐つてしまつたと云ふ話ですからなあ。それでも元氣だけは、相かはらず盛なものです。

「遠藤が今度、法理學新論と云ふ大部なものを書くさうだが、俺も一つ一世一代で、何か書いて見たい。」つて云つて居られました。

亨 あの男？ 身體は、あの元氣一つで、持つて居るのだ。随分長い肺病だから、普通の人なら、もう餘程前に死んでゐる筈なのだが。

（間）又東京へ歸つて來たのかしらん？

三吉 いゝえ。やはり逗子に居られるさうです。「今日は久し振で、東京の空氣を吸ひに來たのだ。」つて笑つて居られました。

亨 俺は巴里では、内田と始終同宿して居つたが、其時分から腦のいい偉い奴だつた。併し一體虚弱な上に、亂暴な生活をしたものだから、彼奴の思つて居た仕事も出來ない内に、あんな病氣に取つかれてしまつた。惜しいものだ。

三吉 さうです。（懷中時計を見る。）何と云つても商法ぢや、あの方と肩を並べる學者は、一寸見付かりませんかなあ。や、もう八時だ。（立上る。）

亨 まあいいだらう。ゆつくりして行き玉へ。三吉 えゝ。有難う御座います。一寸他處へ寄らなければなりませんから――

敏子 まあ御話なさいます。久し振ですもの。

三吉 えゝ。またあがります。では先生、先刻の御話は宜しく願ひます。

亨 よし。承知した。

（三吉、博士夫妻に挨拶して、右側の入口より去る。）

（夫妻は三吉を見送つて、又室内に戻り來る。）

（敏子、紅茶の道具を片付ける。）

敏子 互理さんはいらつしやいませんか。

亨 急な病人でもあつたのかしらん。それなら電話でもかけさうなものだな。

敏子 さうで御座いますねえ。

亨 來たら此處へ通してくれ。さうして葡萄酒でも出したらいだらう。互理は酒好きだから。

敏子 はい。かしこまりました。

（敏子左側の入口より去る。）

（博士は室内を歩き廻り、窓より空模様を覗ひ居る。）

（敏子また入り來る。）

亨 明日はまた雨らしいな。（かく云ひ終りて讀書卓の方へ歩み來る。）

敏子 厭で御座いますねえ。

亨 （此れには答へず、卓上の葉巻を取り、火を點じてソファの方へ歩み行き、陰鬱なる表情にて、ソファの上に横たはる。やや暫らく、頭の痛むを指にて押さへ居る。）

敏子 そんなに御痛みになりますなら、御冷や

しになつては如何です。氷を取りにやりませうか？

亨 いや。それにも及ぶまい。（間）實に妙な痛み方だ。

敏子 困りますねえ。何うしたのでせう。

（少時沈黙。）

亨 （夫人を直視して）おい。敏。

敏子 はい。

亨 妙な事を訊くやうだが、汝は今日何處へ行つた？

敏子 私で御座いますか？

亨 うん。

敏子 一寸御友人の處まで参りました。

亨 （柔らかに）御友人の處ぢやあるまい？

敏子 （博士を凝視して）いゝえ。御友人の處で御座います。

亨 （微笑して）汝は俺も欺くつもりだね？

敏子 （鋭く）いゝえ。たしかに御友人の處へ参りました。

亨 （間を置きて）俺はよく知つてゐる。汝は今日精一の墓にまゐつたらう。（不快なる表情にて、なほ夫人を直視す。）

敏子 （俯首く。）――

亨 今日學校で教授會議があつたので、俺は三時頃出かけてゆくと、松島が丁度其處へやつて來て、「やあ、遠藤君。今、染井の墓地で、君の細君に會つたよ。」と云ふぢやないか。（間）それをきくと、汝が精一が死んで以來、時々烈しい憂鬱に落入つたり、また此頃三日

を置かず、俺に隠れて何處かへ出かける理由が、始めて分かつた。(やや長き間)それは親子の情で、當然の事だから何も隠すには及ばない。公然出かけたらいぢやないか？

敏子 ……

亨 (半ば獨語のやうに) 併しあの兒が生きてゐるうちはあれ程厭だつた汝が、何うして死

んでから、急に精一を慕ふやうになつたらう。

——俺には何うもその心理が分らない。

敏子 (徐ろに頭をあぐ。次第に感激す。遂に

神經的に嗚咽して) それは私自身にも分かりません。私は始めて精一を生んだとき、あの醜い獸のやうな顔付を見るのが、厭で耐らなかつたものですから、無慈悲なやうですが、

始終心の中では、早くこの兒が死んでくれればいい。此兒が生きてゐる爲めに、私は生活の快樂を味はふ事が出来ないのだ、とばかり思つて居りました。さうしますと、去年、五

年間私の苦痛の種子になつてゐた精一が、死んでしまひました。私はひそかにそれを喜こんだので御座います。これから美しい生活

が、私の前に開けると思つて、あさましい事です、私は始めて安心しました。(間)ま

あ、その當座の二三ヶ月は、楽しく過ぎ去りましたが、不思議にも、この春あたりから、

私は何とも云へない物寂しさを感じました。

私はこの譯の分からない憂愁をまぎらはす爲めに、芝居や音楽會や婦人會や、なるべく人の多い華やかな場所に出かけたのです。併し

何うしたのか心の寂しさは、私がまぎらさうと思へば思ふ程、ふかく胸の奥底へ喰ひ入りました。私にはあの兒の生きて居た時分の生活が、戀しくなつてまゐりました。それから以後、私は心の空虚に悩まされるときは、い

つも貴方に隠れて、精一の墓にまゐりました。あすこは私の靈魂の避難所で御座います。あ

の兒の墓の前に立つて、時のたつのも知らずに種々な事を考へて居りますと、深い地の底

から慘ましい血族の聲が、私を呼ぶやうな心持がいたします。それを訊くと、始めて私に

は、自分の生きてゐるのが、よく分かつて参ります。

亨 つまり汝は精一が死んで始めて血族の愛情を感じて來たのだ。汝は今段々母と云ふもの

になりつつあるのだ。併し何も俺に隠して行く必要はないぢやないか？

敏子 (悲しげに微笑す。) 私は自分の心持の變つてゆくのを、貴方の御眼にかけたたく御座いませんでしたから——

亨 俺は決して汝の心持のかはつたのを、悲しみはしない。

敏子 (博士を凝視して) 私は母となるより、婦人として生きたく思ひます。

(下婢みよ、右側の口より現はる。)

みよ あの旦那様、互理様がいらつしやいました。

亨 さうか、此處へ御通し申せ。

(みよ去る。)

(博士讀書卓の方へ歩みよる。)

亨 (夫人に向ひて) 互理には少し祕密の用事があるから、汝はあつちへ行つてゐてくれ。

敏子 はい。

(醫師互理慎太郎、みよに案内せられて現はる。半白の髭あり、羽織袴に金縁の眼鏡

をかけ、小なる袍をさげたり。)

亨 やあ。先刻は失敬した。

互理 いや僕こそ。(夫人に向ひて) 夫人。暫らく御無沙汰しました。(首を低ぐ。)

敏子 いえ、私こそ。先日から一遍伺はうと思ひながら、つい——(頭を低げる。)

皆様御變りも御座いませんか。(三人小卓をかこみて坐す。)

互理 有難う。皆無事です。(博士に向ひて)

も少し早く來ようと思つたが、生憎一人むづかしいのがあつたもので、つい遅くなつてしまつた。

亨 いや。——御忙がしい所を、わざわざ御呼立して濟まなかつた。

互理 そんな心配はいらない。呼ばれて診察にゆくのは醫者の務だ。はゝゝ……

(少時沈黙。)

敏子 何うぞ御ゆつくり。(一體して左側の入口より去る。)

亨 (煙草箱を出し、まづその一本を自から取り、火を點す。互理も無言にて、一本の葉巻

を取る。今夜は何だか蒸熱いぢやないか。

互理 何れ降るだらう。(間)この邊は全く静

かていいな。(室内を見廻す。)

亨 静かな事は静かだ。何しろ此處に住んでゐるのは、大抵官吏か、學校の教師みたやうな人間ばかりだからね。

互理 さうさ。我々とは全く生活が違ふ。毎日きちんと出勤して、歸つて來れば、もう用事はないのだからね。

亨 そのかはり君達のやうに、金が取れないから、同じ事だよ。

(みよ、葡萄酒を持ちて、左側の入口より登場す。博士互理に酒をすすむ。)

互理 や。もうかまふのはよし玉へ。(葡萄酒を飲む。)

互理 僕はこの頃、少し頭が悪いので、なるべく酒と煙草をひかへるやうにしてゐるが、仲々苦しいものだね。

亨 さうだらう。何しろ酒と煙草に掛けては、君の名聲は大したものだったからなあ。あれが所謂醫者の不養生だね。はゝゝゝ……

互理 ……はゝゝゝ……併し酒はまだいいが、この煙草と云ふ奴は忙がしいとつい喫み過ぎて困るよ。

亨 併し二三杯はいいだらう。(酒をつぐ。)

互理 有難う。まああんまり頂くまい。(ハンケチを取り出し口をふく。)

時今日電話で診察してくれと云ふ話だった、一體何處が悪いのだい？

亨 實は此間から、夜になると、毎晩頭が痛んで來るのさ。そのくせ晝間は、忘れたやうに癒つてしまふんだが——あまり妙だから、君

に一遍診て貰はうと思つて——

互理 ふうん。夜になると、頭が痛む。——外に何か變つた事がありはしないか？ (博士を直視す。)

亨 一日、身體がだるくて、何をしても、すぐ厭きて嫌になる。

互理 能く眠れるか？

亨 いゝや。眠れない。始終うとうとしてゐて、一寸眠つたかと思ふと、實に氣味の悪い夢許りみる。(間)それに盗汗が非常だ。

互理 なる程。(注意深く博士をみる。)

食事 は？

亨 一向進まない。何うだらう。腦が悪いのかねえ？

互理 さあ兎に角診察してみないと分からんが、(鋭く博士を見る。間)君は若い時分、放蕩をした覚えはないか？

亨 放蕩？ (やや長き無言。)

何うして？

互理 放蕩をやれば、よく種々な病氣を引きつける。その病氣の内には、十年以上身體の内

にひそんでゐて、急に腦を犯すのがある。

亨 ふうん。

互理 何うだい。あるだらう？ (間)君もそんな事は云ひ憎くからうが、併し醫者に向つて、隠すのは愚だよ。

亨 (やや長き間) 實はさう云ふ事がないでもない。

互理 さうだらう。(間)僕は精一さんの生れたときから、既に君を疑がつてゐた。

亨 (愕然として) え。精一。(間)ではあの子

供も、僕の病氣の影響をうけたのか？

互理 さうさ。君にさう云ふ祕密の病氣があると云ふ事を、不幸な精一さんが、僕等に説明してくれたやうなものだ。

亨 (やや長き間を置く。沈痛に) 併し僕はあの忌はしい病氣を發見したとき、充分療治をして置いたが。——

互理 あの病氣は癒つたか、癒らないのか、醫者にも分からない事があるからねえ。(間)

一體君は何時やつたのだい？

亨 まだ巴里に留學してゐる時分だった。

互理 では西洋人から感染したのだね？

亨 さうだ。

互理 それでは少し性が悪いかも知れない。異人種間には、普通劇烈に來るものだからね。

亨 劇烈に來る？ 併しあの病氣は今の醫術では、それ程恐るるに足らん物ださうぢやないか？

互理 さう。大抵は癒るが——併し腦を犯された奴は、その程度によつては、豫後不良だ。

亨 豫後不良と云ふと？

互理 (博士をみる。間) 發狂するか。白痴になるか。または腦溢血で急に死んでしまふ。

亨 (慘ましく表情す。)

ふうん。

互理 一體何時頃から頭が痛み出したのだい？

亨 (深く考へに沈みゐる。)

互理 (博士を直視して) おい。遠藤君。頭の痛み始めたのは何時だい？

亨（考へより覺む。）え。——さう。此四月の初め頃からだつたと思ふ。

互理 それはいかに。何故早く僕に云はなかつたのだい？

亨 それ程のこともあるまいと思つてゐたものだから——

互理 兎に角一寸診察してみよう。

亨 では御願ひしよう。

互理（半ば獨語のやうに）眼底検査の器械をもつて来たかしらん。（袍を引寄せその内より検眼鏡を取出す。）あゝ。あつた。（博士に向ひて）それから御手数だが、これから網膜の異常を調べなければならんから、ランプを一つ拝借したいものだ。何んなのでもいいから——

亨 一寸待ち玉へ。（立ちて壁側の呼鈴を押す。）

みよ（左側の入口より現はる。）何か御用で御座いますか。

亨 夫人は？

みよ 御庭を御歩きになつていらつしやいます。では奥にランプがあるだらう。あれを持つて来い。

みよ かしこまりました。（去る。）

互理 では始めよう。上衣を脱ぎ玉へ。

（博士上衣を脱ぐ。互理椅子を博士の方へ寄せ、診察をはじめむ。）

（みよ登場す。手に鍍銀の小ランプを携ふ。これを卓上に乗せて。）

みよ これでよろしう御座いますか？

互理（振りかへりて）あゝ。結構だ。（みよ去る。）

（互理診察を終りて立上り、そのランプに火を點じ、博士に。）

互理 君。一寸電燈を消してくれ玉へ。

（博士立ち上りて電燈を消す。室内やや暗くなる。）

互理 此れでよし。君この洋燈を君の後の卓の上に乘せてくれ玉へ。

（博士ランプを讀書卓の上に置く。）

亨（ふりかへりて）此邊でいいかい？

互理 あゝ。よろしい。さあこれから眼底検査だ。君は僕の左の耳を見て居玉へ。いいかい。

（互理検眼鏡を以てレンズを通りたる光を博士の面上に反射せしむ。博士の眼のほとりの皮膚の色、燈光に映りて、疼くやうに鮮やかに見ゆ。）

互理 ふうん。（間）こんどは右の耳を見るのだ。さう。（やや長き間）さう兩方とも乳頭鬱血を起してゐる。（獨語のやうに云ふ。）

（眼底検査終る。互理検眼鏡、レンズ等を納ひながら。）

互理 君はやはりあの病氣に、腦を犯されてゐる。しかももう餘程進んでゐるやうだ。

亨（沈痛に）さうか。（長き間）で、恢復の見込は？（互理を直視す。）

互理（冷然として）病氣は無論癒る。併し腦に出きた腫物の痕の缺所は、癒るものではない。（間）君の運命は、その缺所の大小によつて定まるのだ。

亨（間を置く。平靜を装ひて）發狂するとか、白痴になるとか、腦溢血で死ぬとか？

互理 さうだ。誠に御氣の毒だが、今の醫術の可能性は其處までだ。

亨（沈思。長き無言の後、悲痛なる微笑）つまり論理的に完備した結論に到達したと云ふだけの事だね。

互理（短き無言）なるべく早い方がいいが——何なら僕の病院に、入院してみないか？

家に居ると、何うしても種々の事に、腦を使つたり何かして、病氣の爲めによくないだらうと思ふから。

亨 さう。

互理 君の方都合さへよくば、明日にも來たまへ。部屋を明けさせとくから——

亨 さう。（沈思に耽ける。）

（少時沈黙。）

互理（隣室の時計十時をうつ。）

亨（沈思より覺めて）では、僕は御暇しよう。

互理 あゝ。さう、さう。先刻電話では外にも何か用があるやうだつたが？

亨 あゝ。（考へて）併しかうなつては、あんな事は相談した處が仕方がない。（間）實は家内だがね？

互理 うん。

亨 この頃またヒステリーが、段々烈しくなつ